

この園長通信をどのような方たちが読んでくださっているのか。実は把握できてはいない。その多くは、大人の方だろうということは想像に難くない。では、下の年齢というとなくなるか。中学生で読んでくれている人はいるかもしれない。それもあって、中学校の部活動や職場体験のことなどを書いたこともある。

小学生はどうだろうか。読者として、小学生は想定していなかった。ところが、読者に小学5年生がいることがわかった。多少驚いたが、うれしかった。同時に、すごいなと思った。自分が小学5年生だったら、果たして読めるだろうか。たぶん、読めない。今でも、人が書いた文章を毎日のように読むのはむずかしい。実際、やったことがない。文章を書くことはできても、読むことはできない。

それもあってか、読んでいただいている方に対する敬意には、並々ならぬものがある。そのためであろう。この前、出版したばかりの書籍のあとがきに、こんな一節を書いた。「文章には、読んでもらう相手が必要である。相手、すなわち読者には、直接お会いして感謝の言葉を伝えたい思いがある。」ごく自然に出てきた文である。

小学5年生もすごいが、この書籍を学校に持っていき、朝の読書の時間に読んでいる中学生がいる。これもまたうれしい限りである。そういう方法もあったのかと教えられた。その中学生に、ぜひ読んだ感想を聞いてみたい。小学5年生とは、ぜひ会って話をしてみたい。

毎日のように文章を書くようになって6年目になる。今までの原稿から書籍をつくる都合もあって、1000号を超える原稿を何度か読み返した。同じ人間が書いている文章なのだが、少しずつ変化してきていることに気づかされた。ずっと読んでくださっている方のほうが、そのことに気づいているかもしれない。

読者の存在は大きい。自分の行動範囲が以前よりもかなり狭くなった。そのためか、園長通信の反応を聞く機会はそう多くはない。幼稚園の保護者の方々や職員が多くなる。幸いなことに、書いた本人よりも、「校長室だより～燦燦～」 「園長通信～ころ～」に詳しい読者が、目の前にいる。本人は書いた内容を忘れてしまっているが、目の前の読者からは、すぐに内容が出てくる。ありがたいし、すごいと思う。

今までも相手意識をもってきたが、これからも読者のことを考えながら文章を綴っていきたい。できれば、たった一人の読者に向けた文章を書いていきたい。現実には、なかなか思うような文章にならない日が続く。それでも、書き続ければ、何かが見えてくるような気がしている。